

黒田夏子『組曲 わすれこつじ』

黒田夏子『組曲 わすれこつじ』は、横書きだが、カタカナを用いず、「仏壇」を「仏壇」、「塗り絵」を「塗り絵」と呼ばず、ラクダ、トンボ、桜など動植物の名称も、多くの和語で軟らかく説明される。これは速読を拒む。

早くに両親を失った語り手が、戦後、急速に血縁の結びつきが薄れてゆくなか、海岸の自家の別荘で、「二代まえの血統」に引きとられ、「養育がかり」と六人ほどで暮らした幼い日々の記憶を辿るが、いまは遠くへだたった思い出は旧家に遺された物や家具、幼い日々の遊びなど、テーマごとに輪郭がくつきりしてきたり、振れたり、他者との関係の裏側が見えてきたり、連想や反省に満ちて迷路の中を歩きはぐれて途絶えがち。それゆえ組曲。この全体の構成は要約を拒んでいる。詩にも似て、言葉のワザを楽しむ作品なのだ。

ふつうなら子守と呼ぶところを「養育がかり」、飼い犬を「愛玩獣」などと役割で呼び、一人称「私」を用いず、場面場面で「成育途上者」「観察者」「想起者」などと規定し、記憶想起の唐草模様のなかにはたらく自意識が刻み出される。このようにして語り手の自己形成の過程がほの見えてくる。和語と漢語の使い分けは日本語の特徴の一つだが、この独自の組み合わせによる語り口は比類がない。日本の文芸ならではの達成である。（鈴木貞美）